
～ウシナッタモノ～

無月藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ウシナツタモノ～

【Nコード】

N0843B

【作者名】

無月藍

【あらすじ】

僕はユウキを失って…彼女は記憶を失った。――僕は傷ついたけど、彼女も傷付いたんだろうな…。

本当に選んでよかったの？
この選択・・・。

間違ってたのかな？

涙は…こぼれ落ちて。

「直也？」

「あ、茉莉！？」

直也は笑った。

「ひ、久しぶり。」

「うん。」

大きい背中。

さらさらの髪。

はにかむ笑顔。

貴方は何も変わらないんだね。

「茉莉・・・？」

「ん？なんでもないよ。そうだ、久しぶりに会ったんだから何処か行こうよ！用事ある？これから。」

「あ、ないよ。」

—三年前。

私……、誰？

ある日突然起きたとき気づいた喪失感。
私は突然記憶を失ってしまったのだ。

私は、しばらく安静にということで、病院に入れられた。
私と、直也の事だけは全て忘れていたのに。

なぜか他のコトは全て覚えていた。
原因は不明だった。

「茉莉・・・ちゃん。」

その人は、呼び捨てをためらってちゃんを付けた。

「僕のコト覚えてるかな？」

・・・・・・。

顔も知らない。わかんないの。

「知らない。貴方誰？」

私は言い切った。

「僕は、桐 直也。君と同年だよ？見覚えないかな？」

男の子は優しく聞いた。

「知らないって、言ったよ？」

・・・。

「そつか・・・。これ、花束。良かったら病室に飾ってね。じゃあ。」

男の子は一瞬はにかんで、さっと帰っていった。

帰り際は、一瞬悲しい顔をしてたような気がした。

僕は、泣いていた。全く声を上げず。
愛していた子に、

「知らない。貴方誰。」
と言われてしまったら。
貴方も泣くだろ？

「君は・・・僕の彼だなんて言えない・・・。」

「また来たの？」

私は直也君にそう聞いた。

「うん。」

「変なヒト。」

「え？」

「貴方変だよ。」

「天然とは言われるけど・・・？」

「意味が違うよ。」

私達は笑い声を上げる。

私は記憶を徐々に取り戻していった。
直也のコトを除いて。

「はぁ・・・。」

私は曲がり角を歩いて曲がった。はずだった。
突如前から来たヒトにぶつかった。

「い・・・って・・・。大丈夫君!？」

自分のずれたメガネを直しながら、お兄さんは言った。
2〜3歳年上だろうか。

「だ、大丈夫です。」

「そっか、良かった。じゃ。」

「あ、そうだ俺503号室の椎名 仁っていうんだ。」

「私は、祐希 茉莉といいます。308号室のものです。」

私たちの会話は・・・

弾んでゆくばかりだった。

「本当、毎日来るんだね。直也君。」
「うん。」

直也君は今日も私に会いに来た。

僕たち、また付き合ったり出来るのかな？
そう思っている直也が居たが、反対に
私達友達だよね。
と思っっている茉莉が居た。

そして、退院した私は翌日から学校へ戻ることになった。

「茉莉。一緒に帰ろう！」
「う、分かった。」

「お待たせ。直也。」
「良いよ。」

（椎名さん……。会いたい……。）

僕たちはこのままあのころに戻る。
そう確信していたある日。

僕は茉莉から聞かされた。

「私好きな人がいるんだ」。

「へえ。誰？」

「私に通ってたあの病院にいた人だよ。椎名 仁さんって言うんだ
けど。」

— え？

彼女はぺらぺらと椎名とか言う奴の話 시작했다。

— 止めてくれ……もうたくさんだ！

「やめろ！もうその話はするな！うざいんだよ！」
「っ・・・！直也？」

「出てけ。この部屋から。俺から消えろ。」

その日から、茉莉は視線さえも反らすようになった。

「私達、縁切ろうか。」
突如茉莉は言った。

もちろん、断るはずもなかった。

そして、そのまま・・・三年が過ぎ今日に至る。

カチャカチャ。

食器とフォークが当たる音がする。

「美味しいね。」

「うん。」

「あのさ、直也。私全部思い出したの。」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

「直也に誤りたかった・・・・。本当にごめん。仁とは別れたの。本当は直也が大切だって思い出したから。」

「ごめん。彼女が居るから。」

僕は嘘をついた。

「そっか、私、都合よすぎだよね……。ごめんね。直也。私達縁切ったんだよね？」
「うん。」

「もう、疲れたんだ。茉莉の相手するの。」

フォークは、ただカシャンと床に落ちた。

好きをいえない、僕はただのオクビョウモノなんだ。

~~~~~

初めまして。

無月藍と言います！

宜しくお願いします。

私には四つの偽名があります

「山もす」「堇」「優音 琉莉」そして「無月 藍」  
知ってる方は話しかけてくださいね。

ただし、その名前のサイト名は言わないように・・・  
お願いします

それから、

今回の物語

自分のブログよりとってまいりました。  
少し加筆などを加えました。

感想待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0843b/>

---

～ウシナッタモノ～

2010年10月11日23時31分発行